伊勢便り（令和八年十一月号）

一人ひとりの胸に

寺岡　賢
一般社団法人伊勢と日本の心研究所　所長

五十鈴川のほとりを歩くと、木々の緑の中に、黄や紅の色がちらほらと見え始めました。神宮の杜にもいよいよ秋が深まってまいります。

伊勢の神宮では、二十年に一度、社殿を新しくし、大御神に新宮へお遷りいただく「式年遷宮」が行われます。その御用材を神宮へお納めするご奉仕が「お木曳行事」です。外宮へは陸を、内宮へは五十鈴川を、神領民である伊勢の人々や全国から集った人々が力を合わせて曳き入れます。

今年六月の陸曳と八月の川曳に、全国からお越しの皆様とご一緒に携わらせていただきました。

八月二日の川曳の日、炎天下で順番を待っていたときのことです。地元の奉曳団の法被を着た女性が、五十鈴川のほとりに佇んでおられました。お話を伺うと、幼い頃に祖父母に手を引かれてお木曳を見に来たこと、これまで三度携わってこられたこと、八十代の今、二十年先はもう難しいだろうということを、川面を見つめながら、ゆっくりと言葉を選ぶように話してくださいました。

後日、あの日のことを思い返すたび、お木曳でご縁をいただいた方々のことが心に浮かびます。六月の陸曳を楽しみにしながら、病の再発で参加が叶わなかった方からは「皆様の無事のご奉曳をお祈りいたします」と、心のこもったご連絡をいただきました。八月の川曳に参加された女性の方は、終末期のお父様の傍らで、毎日仏壇に手を合わせ「どうかこの行事に行かせてください」と祈りながら当日を迎えられました。川曳の二日後に、お父様を見送られたそうです。今は少しずつ、思い出の品の片付けを始めたと、先日お電話でお話しくださいました。

それぞれの方に人生があり、祈りがあります。お木曳行事もまた、お一人お一人の思いに支えられてきたのだと、改めて思わされた夏でした。

修養団創立者の蓮沼門三先生は、著書『道のひかり』で「残されたる使命のままに、一人の憂を慰め一人の悩を医せんには。かくて天に歓喜あるべく地上に平和を齎さん」と述べ『蓮沼門三全集』第五巻では、修養団黎明期、機関誌『向上』を創刊された頃、資金も印刷も郵送もままならない中、入団の申し込みが届くと「一通の手紙、一枚の入団申込書も、そのたびに神棚に祀って、うやうやしくこれを礼拝した」と記しています。

二宮尊徳翁もまた『二宮翁夜話』によれば、幕府から日光神領の荒地の復興を命じられたとき、祝いに訪れた弟子に「夫我道は人々の心の荒蕪を開くを本意とす。心の荒蕪一人開くる時は、地の荒蕪は何万町あるも憂ふるにたらざるが故なり」と語っています。幕府から与えられた大きな仕事を喜ぶよりも、本当に大切にしたいのは、土地ではなく人の心の田を開くことだと示したのです。

事業や組織に携わっていると、規模や実績といった目に見えるものについ心が向きがちです。けれども、目の前の一人ひとりに思いを寄せ、その幸せを願う心を重ねていくことで、自分もまた育てられていくように感じます。祈りとともに歩もうとする姿こそ、尊い生き方であると思います。

お木曳の綱を握る手には、祖父母や父母から受け継いだ思いと次世代への願いが重なっています。先人たちが重ねてこられた歩みに感謝しながら、皆様とご一緒に、令和九年の第二次お木曳行事に携わってまいりたいものです。

冬の足音が近づく頃、どうぞ心もお身体もあたたかくお過ごしくださいますように――。



五十鈴川での川曳奉曳